



町民文芸

只見短歌会

二月詠草

大塚栄一

指導

遠く住む娘は一言ころぶなと我に声かけ帰り行きたり

馬場 八智

古い母と床を並べて眠りある夜半の寢息に耳傾けぬ

新国由紀子

降雪の少なき今年の雪まつり祈願花火の輝やき映ゆる

関谷登美子

突風にござの折り山を越へまろぶ干したる種類大かた混じる

目黒 富子

浅雪で晴天続く雪まつり会場は数多の人で賑はふ

渡部ヨリ子

仕入れより帰り来し孫幼児に疲れ癒すか高く抱き上ぐ

新国 洋子

物の無き頃思ひつつ曾孫の満了式のスマホに見入る

渡部ゆき子

(出詠順)

只見俳句会

三月定例会

目黒十一

指導

息白し漬物の石定まらず
福寿草裏の堤はまだ白く

味代子

白地の帯吾に残して雪に逝く
美容院出れば風花髪に舞う

弘子

碑に彫らる志士の享年春疾風
彼岸入系図に一行書き加え

恒夫

降る雪や眼裏を占む天衣
沫雪にぽつと点りし街路かな

礼

塩蔵水に戻して彼岸膳
春の雪ソーラーパネル隠しけり

一穂

立春や差し込む陽ざし踏みおりし
窓明けて三月の空独り占め

修一

味噌汁に色を散らしてふきの薹
鈴懸の花手向けあり瞽女の墓

吉児

蝌蚪群れる轍の池の絶ゆるまで
湧き水に蝌蚪湧いて出て見等群れて

幸生

ふるさとの春まだ遠し友の声
イヌフグリ気にも止めずに急ぐ人

信

